

特245

636

信毎經濟記事の讀方

信濃毎日新聞社

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



4

特245
636



信
每
經
濟
記
事
の
讀
方



目次

生絲相場	一
現物相場と清算取引相場	
生絲相場	
掛目	
定期絲	
前場、先物、大引相場	
豊橋乾繭	
人絹市場	一〇
人絹の製法	
格の付け方	
賣買取引	
前場先物値段	
株式界の波瀾	一三
長期清算取引	
短期清算取引	
實物取引	
國債相場	二一
米穀の市況	二四
直江津正米	
深川正米	
標準値段	
神田川正米	
東京清算米	
大阪清算米	
各地清算米	
麥粉	
大豆粕相場	三三
綿絲相場	三四

番手…玉…東京現物…	………	………
砂糖の取引…	………	………
農産物市況…	………	………
日銀帳尻…	………	………
東京市中金利…	………	………
コール…割引手形日歩…東京手形交換高…	………	………
紐育生絲…	………	………
紐育棉花…	………	………
爲替相場…	………	………
銀塊と支那…	………	………
紐育株式…	………	………
紐育公社債…	………	………
紐育砂糖その他…	………	………
大連電報…	………	………
相場用語集…	………	………

信毎經濟記事の讀み方

生絲相場

現物相場と清算取引相場 信濃毎日經濟欄の相場表を見て行くには、まづ二つの考へが必要である。

其の一は「現物相場」で例へば、農家が繭を繭絲會社へ持つて行つて賣捌く時に現物の繭を引渡し、市場の買人が金銭を支拂ひ繭を引取る様に、必ず賣人が實物を引渡し、買人がこれに對して代金を支拂ふ取引より生じた相場で、他の一つは、俗に「定期相場」といひ清算取引より生じた相場で例へば、甲が將來の値上りを豫想して、生絲百斤を八月末引取の契約で、六百十圓の相場を以つて、買つて置いたと假定して、いよく八月末になり受渡をする時が來た時に、其の相場が六百十圓に騰貴して居つたとすれば、此の實際物である生絲を引取らず、其の相場の値上りの差である五十圓を、利益として收得し、此の取引を決済するので、此の差金の收

得を目的として取引された相場、即ち六百十圓を定期相場といふのである。

清算取引は今日、各地の取引所に於て各種たとへば生絲、人絹、株式、米、綿絲、砂糖、大豆粕等の商品について行はれて居るが、賣買の希望者は直接取引所によらず、其の所屬の取引員に委託することになつてゐる。

さて、現物相場は上述の如く、現實に物品の賣買取引をするより生じた相場であるから各自の販賣又は買入れをしやうとする物品の値段に最も近い相場なので、日常新聞の相場表を利用して取引する者はこの現物に近いといふことに注意して行くことが必要である。また、定期相場は、將來の豫想が織込まれてゐるのであるから、その商品の相場の變化の動向を知り、且將來を豫測し、財界の觀測をなすに、欠くことの出来ない材料である。

生絲現物

現物 前場 前日外電の小
駈りを入れ氣配小堅く前値見當
に商談始りD格六百十圓黃二十
一中A格五百七十圓の振合にて
商内繼續の風情で變りなき場面
であつた

さて、我が國の生絲は、昭和九年には約五十萬俵(一俵は百斤)の輸出を見たのであるが、これは殆ど横濱、神戸の二港より海外に積出されたもので信州の生絲は横濱に近い關係から大部分こゝに集中されるのである。

そこで、農家で生産された繭は市場から製絲家に行き製絲家から生絲となつて横濱又は神戸の生絲問屋へ渡るのであるが、横濱の生絲問屋は六十軒程あり各地の製絲業者から、販賣を委託された生絲を受取ると直ちに

入庫し、其の中一部を生絲検査所に送り検査を受け格付をしてもらふのである。

この検査に合格の生絲は見本を取出しそれを持參して商館を歴訪し賣捌く。そこで商館は適當と思はれる問屋より生絲を買入れ海外に送るのである。目下外國商館は十五、邦商は十會社、うち取扱高は邦商が約八割を占めてゐる。中でも三井物産、日本綿花、原合名、江商、日本生絲、旭シルク等が大きく、特に三井物産は其の取引高が最も多い。毎日新聞紙上に掲げられる現物相場は、其の日の午前中に三井物産の商談室で、見本を持參した問屋の番頭と、三井物産側との間に取決められた相場である。

前掲の現物相場で、現物の下に「前場」とあるは、午前中に出來た相場であることを意味し三行目の「D格六百十圓」は夕刊發行の日の午前中の横濱の生絲相場―詳しく言へば白十四中D格六百十圓である。

白は申すまでもなく、白繭から操絲した生絲で十四中はデニールつまり絲の細さを表はしたものである。一デニールとは、長さ四百五十米、重さ〇・〇五グラムの絲で、十四デニールとは、其の十四倍の太さといふのであるが、實際に於て十四デニールを標準にしても、それと同じ物を得ることが困難なため十四を中心にして一四・五デニール、一二・五デニールまでを許すことになつてゐる。

D格は横濱生絲取引所の格等級、合格基準A B C D Eの五格中のD格であつてこれを標準格

と定められて居る。つまり、此の現物相場六百十圓は、標準絲D格百斤(十六貫)の値段であるが、實際は標準格より上にC格、B格、A格、其の下にE格の絲があるのだから、D格を基準とし格差を定めて取引をしてゐる。

掛目 此の現物相場六百十圓から、繭相場によく用ひられる掛目と呼ばれるものを算出するには

$$(絲價 - 生産費) \div 16貫 = 掛目$$

の方法を用ひるのであるが、又そこに生産費を何程にしてよいかといふことに、異論が生じて来る。例へば、昨年十二月に農林省より發表された昭和七年六月より昭和八年五月迄一ケ年の生産費を見るに、百七十三圓十一錢であり、京都府下の某工場では、昨年春頃九十六圓位(生絲百斤の生産費)と發表してゐる。其の他百二十圓、百五十圓など、色々言はれてゐる。そこで中間をとつて先づ百四、五十圓といふ所が適當ではなからうか、すると

$$(610 - 140) \div 16 = 29.3$$

即ち二九・三掛といふ筈が出る。又生産費を百五十圓とすると、二一八・七掛となるのであつてつまり現在の絲價からする繭價は、二圓九十三錢乃至二圓八十七錢といふところである。尤もこれは十絲即ち、百匁の繭から十匁の生絲が出るのをとつたので普通信州の絲は、春繭十二匁十三匁とれるのが、珍らしくないから、十二匁とすれば

$$2.93圓 \times 1.2 = 3.516圓$$

二圓五十二錢となる。

横 濱(單位圓)

前場一寄引	二寄引	後一寄引
3 五〇	五八	五九〇
4 五〇	五八	五九〇
5 五〇	五八	五九〇
6 五〇	五八	五九〇
7 五〇	五八	五九〇
8 五〇	五八	五九〇

神 戸(單位圓)

前一節	二節	三節	後四節	五節
3 五九〇	五八五	五八九	五八九	五八九
4 五九四	五八八	五八七	五八七	五九〇
5 五九七	五九二	五九二	五九五	五九五
6 六〇〇	五九六	五九六	六〇〇	六〇〇
7 六〇三	六〇〇	六〇〇	六〇三	六〇三
8 六〇六	六〇三	六〇三	六〇六	六〇六

定期絲 「横濱」とあるのは、横濱取引所「生絲の外に株式を取引す」に於ける生絲清算取引の相場で「神戸」とあるのは、神戸取引所(外に株式、米の取引をなす)に於ける生絲清算取引の相場である。「前場」(本場ともいふ)とあるは、現物の時と同じく、午前中に出来た相場を表し「後」又は「後場」とあるのは午後出来た相場を示すものである。なほ建値は百斤(一俵)十六貫(建で單位は圓で、賣買される標準絲は「白十四中D格」といふことになつて居る。

上掲相場の上に345678とあるのは、限月といひ、賣買期限のことであつて、三月限、四月限と、八月限即ち六ヶ月先まで、賣買が出来るのである。次に右側に、一、二、とあるのは一節、二節と云つて、一節二節の二くぎりになつて居り、其の一節中に、寄一寄付、引一引付と二つ相場が出来、いづれの相場であつても一番先に出来たのを寄付、最後に出来たのを大引といふ。

横濱取引所の立會(賣買取引)の前場は第一節午前九時三十分、第二節は午前十一時三十分、後場第一節は午後一時三十分、第二節は午後三時三十分を開始されることになつて居り、神戸取式所は前場後場を通じて六節とし第一節は午前九時三十分、第四節は午後一時三十分で、午前中に三節午後三節である。

けふの前場引値
(單位錢)

横濱生糸	六四〇〇	四〇〇安
東京人絹	七二〇〇	一〇〇安
豊橋乾繭	二八七〇	一〇〇安
短期新東	一四七〇	一四〇高
東京期米	三三六	二五安
東京縮糸	二六〇〇	二〇安
スチール	—	休み
米日爲替	—	休み

立會の順序は先づ、三月限の第一節寄付から大引までゆき八月限で一節を終り、第二節を三月限寄付、大引と立會つて、同じく八月限に至るものである。

前場、先物、大引相場

横濱は、前場に相場が二十四、神戸は十八あるが、多忙な時は勿論、さもなくとも、毎日此の二十四、又は十八の相場に、一々目を通して行くことは、此の方面に専門の人以外には容易ならないことなので普通には、横濱前場の先物八月限第二節の大引相場、此處では六百十圓に、神戸は、前場の八月限第三節の六百十二圓によく注目し、これを昨日と今日、前月と今月、前年と今年といふ様に比較研究し、生糸相場動向の観測材料とすべきである。(けふの前場引値参照)

生糸は申すまでもなく、本邦生産の大部分が米國へ向つて輸出されるのであるから常に、消

費地の財界、即ち米國の經濟狀態の如何が直ちに本邦絲價に反映するのである。

現に、昨年十月以後に於ける生糸の騰勢を見ても第一の好材料は、米國の消費高増加により本邦の繭減收は次に考へられる有様である。従つて、後述の「海外市況」にある紐育生糸相場は、よく此の間の情勢を物語るものであるから横濱、神戸の相場を見る前に先づ、海外市況の紐育生糸、株式の相場を観察することが必要である。

豊橋乾繭 豊橋市は我が國有数の繭の消費地であると同時に、また唯一の乾繭集散地である。昨年中に同市に集散した乾繭は八百餘萬貫に上り生繭に換算して約二千五百萬貫である。故に全國の繭商人は何時でも豊橋に行けば自由に乾繭の購入が出来、又販賣も容易なため年々其の取引股となり全國乾繭の中心市場をなすに至つた。

此の現狀に鑑みて同市蠶絲業關係の諸團體が昨年十一月八日から乾繭取引の商談成立を容易にし且つ取引の迅速をはかり、賣買取引を公開して公正なる値段を發表しやうとして創設開市したので此の豊橋乾繭市場である。

同取引市場は會員組織で會員資格は(イ)繭の賣買業を一ヶ年以前より經營しつゝある者(ロ)製絲業を一ヶ年以前より經營しつゝある者(ハ)繭の倉庫業を一ヶ年以前より經營しつゝある者(ニ)前記營業の實務に五ヶ年以上従事したる者で以上の一つに該當する者が會員二名以上の紹介に依つて入會を申込み市場代議員會の承諾を経て會員となる事が出来るのである。現在の會

員数は三十名となつてゐる。取引は現物賣買と先物賣買との二つで市場取引は會員にかぎられて居るから、當市場を利用して賣買取引をしやうとする者は此の會員に委託するのである。

先物賣買 先物賣買は今、賣買取引をして置いて、其の受渡を當月末即ち三月末から順次

豊橋乾繭(單位十錢)

A 格	前場	後場
(十貫建) 現物	先物	現物
三月限	二七 二七 二七 二七	二七 二七
四月限	三〇 三〇 三〇 三〇	三〇 三〇
五月限	三三 三三 三三 三三	三三 三三

六ヶ月先即ち八月末まで契約するもの、上掲相場表中の三月限、四月限、五月限といふのは三月末渡、四月末渡、五月末渡を表はしたもので此處には三ヶ月先まで示されてゐる。そして賣方は、必ず受渡期日に現品を引渡さなければならぬのであるが買方は、買付けたものを受渡前に自由に轉賣することが出来る。先物賣買は、總て標準品に依つて取引されるのであるが

其の受渡に標準品が無ければ、之れに代るべき代用品を供用することが許されてゐる。

標準品 此の市場で取引される乾繭は、精繭(本乾燥をした繭)と玉繭の二種で精繭は左表のように優等より八等までの九種に分れて居て優等から五等級までをA格、六等級から八等級までをB格と呼んでゐる。

精繭A	優	一	二	三	四	五
各等級	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
掛目増減率	三	二	一	〇	(-)	(-)

精繭B	六	七	八
各等級	(+)	(+)	(+)
掛目増減率	一	〇	(-)

前掲相場表中に、A格とあるのは、右表の優等より五等までのA格取引の相場を表はしたものの、A格の標準品は二等級の白繭で生絲量三十五匁の本乾繭(三十五匁とは百匁の乾繭から、三十五匁の生絲が得られるもの)と定められて居る。受渡の代用品には精繭五等級以上生絲量二十九匁以上の、白精繭及び黄精繭が許されてゐる。

受渡に供用される乾繭は同市場で封印を施し愛知縣繭検定所の検査済のもので更に一月から六月までは前年産又は當年産の繭を受渡し、七月渡以後は當年産を受渡することに定められてゐる。又受渡の一荷口は、百貫(荷造は五貫入二十個)單位で、取引数は其の整数倍に限り特別の場合以外は端數を用ひないことになつてゐる。乾繭の受渡數量は、封印當時に於ける重量を用ひるのであるが、取引生絲量は検定表示の生絲量の 百分ノ九十九 として計算されるのである。

現物取引 現物取引には繭検定證に依つて賣買約定をするものと、標準品に依つて賣買するものとの二種がある。検定證によるものは其の乾繭を引渡さなければならぬが、標準品に依るものは賣方の注意で代用品を引渡すことが出来る。

賣買取引の約定は、相對賣買を原則として行ひ、受渡期間は當月、來月、來々月末の三種で賣買成立日の翌日から約定期間までに於て、買方の任意の日に受渡するのであるから、賣方は何時でも、現品を引渡す用意が必要である。前掲相場表中の前場は午前九時三十分、後場は午

後一時三十分から取引が開始され、現物、先物共に取引単位は百貫(十枚)で、呼び値は十貫建(一枚)、単位は十錢刻みである。

掛目 精繭A格の標準品は二等級生絲量三十五匁であるから、約定値段を三十五で割つたものが、「標準掛目」である。例へば、前掲相場表中の前場五月限の先物百二十圓八十錢から算出すれば

$$120.8 \div 35 = 34.5$$

即ち標準掛目は、三四・五掛となる。

標準品である二等級に對して一等級優等級は何程の格上げ即ち掛目を増すか、三等級四等級五等級は何程の格下げ即ち掛目を減すべきかは、前に掲げた表中の、掛目増減率によるのである。

人絹市場

我が國の人造絹絲業は大正の初年より始まり、最初の生産は神戸鈴木商店の後立てに依つて米澤市の東工業株式會社が、當時各國で漸く用ひられやうとしてゐたヴィスココース式を採用した。これが今日ときめく帝人の前身で大正二年のことである。

後歐洲大戰中の躍進、關東大震災など幾多の波瀾を経て順次進展して來たが、昭和六年頃からは米國に次いで世界の二大人絹國と稱せられる伊太利、英國と競ひ昭和八年の九千四十萬封度の生産から、九年には一億三千七百萬封度の急速度の進出を見るに至り我が國纖維工業の寵兒となつたものである。

此處に於て中央市場に於ける人絹の公定相場を決定し波瀾なき斯界の取引指針を確立すべく先づ昭和七年五月、福井人絹取引所が開設され、續いて翌八年二月東京米穀商品取引所第二部(杉森綿絲市場)内京並に大阪三品取引所内に人絹清算取引が開始されるに至つたのである。

Ⅱ ヴィスココース法 Ⅱ 人絹の製法には(一)硝化纖維素法(二)酸化銅アンモニア法(三)ヴィスコース法(四)醋酸纖維素法の四種類がある。ヴィスココース法以外のものは主として棉花を原料としてヴィスココース法は全部パルプ(パルプは木材を原料とす)を原料としてゐる。而して今、世界の全産額の八割は此のヅ式の方法によるもので本邦でも日本ベンベルグ會社の用ひてゐる酸化銅アンモニア法以外は全部ヅ式を採用してゐる現狀である。ヴィスココース式は英國に於て完成されたものでパルプを苛性曹達の液に浸し、二硫化炭素を加へてヴィスココース式原液を作りこれを濾過して、不溶解物を去りガラスの細管を通じて稀硫酸中に押出したものである。

格の付け方 人絹の格の付け方は一綴毎に肉眼検査に依るもので種類はA B C D Xの五格に分れA格が最も優良で、以下順次に多少づゝ格が落ちる。今日最も多く行はれてゐるのは

長期清算取引 株式の賣買取引方法に現物取引と清算取引との二種があることは生絲、人絹の場合と同じである。

現物取引とは必ず實株と現金とを取換へる取引であつて、清算取引とは相場の變動によつて生ずる差金の收得を目的とする取引である。即ち僅かな證據金(賣買高の十分の一位)で賣買契約をなし相場の騰落の潮時を見て轉賣、買戻(買戻契約をしておいた者は轉賣し賣買契約をした者は買戻す)によりそこに生じた差金を受渡すのが目的で、世間によくある一朝にして株で身代をつくり又一夕にして親譲りの財産を無くしたといふのは、多く此の取引によつたのである。

清算取引には長期清算取引、短期清算取引の二種がある。前掲の相場表は東京日本橋兜町にある東京株式取引所に於ける長期清算取引(略して株式清算)の相場で上記カツコ中の當、中、先は限月即ち受渡をする期限で引値とあるのは其の大引値段である。

株式の長期清算取引は三ヶ月制で當月末に受渡すものを當限、翌月末に受渡すものを中限、翌々月末に受渡すものを先限といひこれを略して當、中、先と呼んで居る。

取引所に於ける立會は取引される株即ち建株が多いので一ヶ所では短時間に二百餘種の全部の賣買が出来ないので一部、二部、三部に分かれ同時に三ヶ所で行はれて居る。相場表の一部、二部、三部は之れで、其の各部に屬する株の種類と配列の順序とは時々變更もあるがほと

定して居る。

立會の順序は第一部、第二部、第三部とも同時に開始され先づ、最初の株第一部でいへば富士紡から當、中、先と三回競賣買の方法で三つの相場を建てる。相場表中富士紡の下に(七二・四四)(一)(九二・七四)とあるは當、中、物の相場で中限が(一)になつてゐるのは「商内出来不申」(アキナイ)で賣買取引が成立せず従つて相場が出来なかつたことを表はすのである。富士紡に三つの相場(當中先)が出来ると、更にそれを今一度當、中、先と繰返して相場を建てる。其の初めの一回を寄付(略して寄)、といひ、次の一回を大引(略して引)といふ。次は富士紡新、鐘淵紡、同新と一株づゝ前と同じ様なやり方で進めて行き最後に新東株同新をもつて第一部が終る。

尙相場表の銘柄中「新」とあるのは其の前にある株即ち舊株に對する語で會社の増資の際に發行された一部拂込の株のことである。又こゝで各銘柄毎に前場、後場各一つ宛の相場しか出て居ないのは各場とも寄付相場を省略したのである。

そこで、毎日此の相場を見て行くのであるが二百餘種の銘柄と、而も一銘柄中に前場、後場がありこれが又當、中、先に建てられてゐるので都合一銘柄について六つの相場がある。これを一つづつ觀測して行くといふことは容易なことでない。故に自己の所有、又は賣買して居る株は勿論であるが其の他は一般に花形株と言はれて居るもの例へば東株(東京株式取引所の株)鐘

出来高	内債	三六、六〇〇圓
	外債	二〇、〇〇〇法
後場	甲五分利	一〇三、五
	特五分利	一〇〇、〇
	同二種	一〇、〇
出来高	内債	一〇三、五〇〇圓
	外債	二〇、〇〇〇法

分れ現物取引にては公債、社債、外國債の總べて取扱ひ長期清算取引にては、國債二四種、地方債三種、社債一二種が上場されて居る。長期清算取引の賣買單位は國債は額面一萬圓、地方債社債は額面五千圓で、呼び値は額面百圓若くは最少額面である。上掲相場表中の國債は額面百圓であるが佛貨公債は額面五百法、賣買單位は一萬法である。

出来高	内債	一〇三、五〇〇圓
	外債	二〇、〇〇〇法
前場	甲五分利	一〇三、五
	特五分利	一〇〇、〇
	同二種	一〇、〇
出来高	内債	一〇三、五〇〇圓
	外債	二〇、〇〇〇法

出来高	内債	一〇三、五〇〇圓
	外債	二〇、〇〇〇法
後場	甲五分利	一〇三、五
	特五分利	一〇〇、〇
	同二種	一〇、〇
出来高	内債	一〇三、五〇〇圓
	外債	二〇、〇〇〇法

現物、清算兩市場に上場されて居る國債、外債は何十種とあるが其の内上掲の表に出て居るものについて説明すると

清算取引の期限は二ヶ月三期制で偶數の月は五日、二五日、寄數の月は一五日を受渡期限とし之れを株式の如く、トウキョリ、ナカギリ、サキギリ當限、中限、先限と呼んで居る。立會は、前場は午前九時三十分、後場は午後一時より開始され、ともに寄付、大引の二回が行はれることは株式と同様である。此の相場表は大引相場のみを掲げたものである。また相場表中に「出来高」とあるのは其の日の午前、午後に取り引された高を示すもので之れを内債と外國債に分つ。

「甲五分利」甲號五分利公債で明治四一年發行昭和三七年償還と、明治四二年發行昭和三八年償還との二種あり現在三億九千九百萬圓ある。

「特五分利」特別五分利公債のこと、現在一億二千萬圓あり、明治三九年發行、昭和十年償還である。

「同一種」第一五分利公債、明治年間に發行されたもので、朝鮮恩賜公債もはいつてゐる。

「同二種」第二五分利公債、大正年間以後に發行され、現在償還期にはいつて居るもの。

「同三種」第三五分利公債、甲五分利、特五分利を除いた五分利公債の内「第一五分利」「第二五分利」を除いた以外の五分利公債をいふ。

「一回四分」第一回四分利公債、明治四三年、四四年、四五年、及大正元年に發行され昭和四四年償還で現在一億六千万圓ある。

「二回四分」第二回四分利公債、明治四三年發行、昭和四四年償還のもの。

「佛貨四分」四分利付佛貨公債、日本政府が明治四三年に巴里で四億五千法發行したもの、目下其の過半數は内地に輸入されてゐる。

國債の取引は、其の値段は凡て裸相場と云つて、利子のことを除いた値段であるから四月一日が利子支拂の日になつて居る公債を三月一日に買ったとすれば、額面は其の時の相場で取定められ別に三月一日までの利子を計算して賣方に渡すのである。

公債は相場の動きが極めて少く投機取引の材料としては喜ばれないが、投資物としては確實なため最近の様に郵便貯金や、銀行預金の利子の下つた時には、最も時代に適合した投資として市場を賑はしてゐる。

我が國は昭和七年以後、インフレ政策の實行から低金利時代が續き年々八億、九億の公債が發行されて居るので従つて、五分利公債(甲號五分利を標準として觀察)の如きは早くも額面を突破し昨年は一ヶ年を通じて百二、三圓から四、五圓台を維持して來た。全く現在は公債の黄金時代である。然し將來此のインフレ政策が轉向され、金利の騰勢を見る様なことがあれば公債相場は落調を辿るであらう。それは昨年十一月初旬の政府豫算閣議に於ける藏相の健全財政説によつて市場相場が動き出したことに照合しても窺ひ知ることが出來よう。

米穀の市況

米の年度變りは、十月三十一日より十一月一日でこれを端境期といひ、そして年々此の端境期前の十月初旬に其の年の米收穫第一回豫想高が農林省から發表される。この第一回收穫豫想高が次の年度の米の需給に指針を與へひいて、米價豫想の大なる材料となるのであつて續いて十一月初旬に第二回豫想發表、翌年一月下旬に實收高の發表が行はれて翌年度米の需給がいよいよ實數に近く算出され米價の見透しもハッキリ觀察されるやうになるのである。

いま昭和九年産米について見れば
第一回豫想 十月 三日 五、七〇二萬石

二回豫想 十一月 十二日 五、〇七四
實收高 一月 二十二日 五、一八三

で、此の實收高の五千八百八十三萬石に朝鮮米八百五十萬石、台灣米五百萬石を移入して内地六千八百万人の需要にあてつゝあるのである。そこで、内地農家は自己の産米から、自家用を引いて残りは之れを市場へ出す。その市場の中で、全國的に中心となつて居るものは東京と大阪である。殊に、昭和八年十一月一日から、施行されて居る米穀統制法の骨子である最高、最低値段が西は大阪、東は東京を中心として定められて居るところを見ても此の二市場の重要さやうかがはれる。従つて大阪、東京には古くから整備された米の取引機關が發達して居る中でも商工省の公認になつてゐる大阪道頓堀市場、東京深川、神田川市場は最も有名なるものである。わが信州は地勢上、東京に近いことと米穀統制法の最高、最低値段が東京市場を標準にされて居ることによつて先づ米價の觀察には東京深川、神田川市場相場を参考にすべきである。然し信州米の收穫は昭和九年の第二回豫想發表で一二九萬石とあり人口は一七八萬人(昭和九年十月一日現在内閣統計局調)と言はれて居るからこれを全國平均、一人當り一ヶ年の消費量一石一斗によつて計算すると一九七萬石となり、六、七十萬石の不足が生ずるのである。此の不足を補ふため本縣は早くから隣縣新潟縣を始めとして各地から移入して居たのである。従つて此の需給關係から自然に新潟縣の西部中心である直江津市場の米價が、全縣特に北信一帯の人々を

して米價観測材料の金科玉條たらしめて来たのである。

直江津正米(一石建)

玄米三等 二七五 白米三等 二九五
玄米並等 二七五 糯米三等 三〇〇
一日の直江津正米は俄然暴騰玄
米三等二十七圓七十五錢白米三
等二十九圓五十五錢と何れも三
十錢はね騰り糯米も三十三圓と
なり一舉に一圓の暴騰を示し尙
昂騰の様様である

米を賣りたい希望者は其の間に現品を搬入し又は見本を持参して相對賣買によつて取引するのである。格付は玄米は一、二、三、四、五、格外の六級で四等米を標準にし、白米は一等より四等までの四級で三等米を標準とする。上掲相場表中並等二七・一五圓とあるは、標準米即ち四等米の一石の相場で、白米三等二九・五五圓は白米の標準格を示したものである。なほ右の相場は市場で出来た相場をそのまま發表したものでなく其の市場に於ける午前中の氣配を推測して作られた直江津「倉庫渡」を標準とした値段である。

深川正米

東京の正米市場は深川區佐賀町の深川市場と、神田區佐久間町の神田川市場とがある。尤も、各驛でも最寄々々、産地から積送された米を賣買して居る者があるので之れも

深川正米(一石建)

値段 二、三十錢高
千葉五等 二八五〇 越後三等 二九一〇
同 四等 二八七五 岩手五等 二八五〇
本 石等 二九〇〇 茨城四等 二八八〇
會津五等 二八七五
出来高 一〇〇〇俵
廻着 一五車 鐵道案内 九車
蔵入 二二七俵 蔵出 二二五俵
在米 一三〇〇〇俵 持越 三三三俵
標準値段(一石建) 二十錢高
上米 三〇五〇 中米 三〇〇〇
下米 二八六〇 平均 二九七〇

神田川正米

値段 二十錢高
賣行 一〇三〇俵 入津 二四〇俵

商人は深川市場で賣捌かうと東京正米問屋組合の組合員に販賣を委託するのである。

産地の米商人から積送された米が、到着すると問屋は一口中の二十五俵から各俵につき一刺づゝを刺取り、之れを混合し茶袋(半斤)大の紙袋へ入れ表に銘柄、等級、産年、荷印、受渡所等を記入し之れを見本として市場へ出し米は直ちに最寄の倉庫へ入庫するのである。市場は廻り廊下になつて居て、廊下に面して各問屋の營業所が區分され設けられてゐる。産地から送つ

一つの市場取引と見られる。上掲相場表中に「廻着十五車」とあるは東京市中の主要驛(汐留、秋葉原を始めとして十數驛)に到着した米の數量を表はしたもので、一車十廻車で百六十俵、十五廻車にて二百四十俵積むことが出来る。又「在米」の所にある數字に深川諸倉庫に蔵入してある米の數量を示したものである。これ等の數量の變化は市中の在米の多少を表はす標準となるもので米價の騰落にも關係してゐる。

深川正米市場は東京正米問屋組合(組合員四七人)の經營に係り本市場に於ける買主は此の組合員以外は誰でもよいが賣主は組合員に限られてゐる。北は北海道青森秋田から、南は熊本鹿兒島縣に至る一道十九縣と臺灣、朝鮮の各米産地の米

て来た米の見本は此處に陳列され、買入れの希望者があればその見本を袋から見本盆に取出し相對賣買で賣買契約をするのである。賣買取引の一口の數量は内地朝鮮、臺灣米は二十俵(呎、袋)以上とし、問屋は賣買成立と同時に「倉庫証券」を以つて受渡することになつてゐる。然し買主の都合によつて、取引成立の日から起算し五日まで受渡を延期することも出来る。

前掲相場中、千葉五等二八・五〇圓、越後三等二九・一〇圓、茨城四等二八・八〇圓は市場内で午前中に取引された各地銘柄の相場でいづれも「深川倉庫渡」(玄米一石建)の値段であるから産地の値段よりは産地から東京までの諸費用だけ高くなつてゐる。

標準値段 問屋は賣買取引が成立すると「蔵出通知書」に渡先、荷主、値段、銘柄、俵數を記入して市場の事務所へ提出する。事務所では取引される内地米、朝鮮米を各々上中下に分ち、問屋から届けられた蔵出請求書の銘柄、値段、俵數により直ちに上中下に振分けて記入しおき、午前十一時頃に締切つて各平均値段を算出する之を標準値段といふ。相場表中の上米三〇・五〇圓、中米三〇・〇圓下米二八・六〇圓が即ちこれである。

現行米穀統制法の政府買入、賣渡の基準である最高値段三一・五〇圓、最低二四・三〇圓は深川、神田川兩市場の標準値段中の中米相場を基準としたものである。だから米價觀測にあつては常に中米相場に注意すべきで、例へば現在中米が三〇・〇圓であるから政府賣渡の値段三一・五圓とは、一圓五十錢の値開きがある。玄米一石は粳にして約四俵だから、一圓五十錢の

値開きは粳一俵の値段にして約四十錢の差である。今粳一俵四等が七圓十錢位で賣買されてゐるとすれば、今後四十錢位の騰貴すべき可能性があるので先づ七圓五十錢處が伸びる範圍であらうと観る。然しこれは大まかな計算で人氣によつては最高値三一・五〇圓を突破することもあらう。が、かかる場合は政府の賣出動が必ずあるものと見たのである。

神田川正米 神田川正米市場も深川正米市場と同じく神田川正米市場組合の經營によるもので大休市場の組織、取引方法等深川市場と同じである。

東京(單位錢)

前場	當	中	先	後場	當	中	先
1	三〇・七	三〇・八	三〇・五	三〇・八	三〇・三	三〇・二	三〇・五
2	三〇・八	三〇・八	三〇・五	三〇・八	三〇・三	三〇・二	三〇・五
3	三〇・八	三〇・八	三〇・五	三〇・八	三〇・三	三〇・二	三〇・五
4	三〇・八	三〇・八	三〇・五	三〇・八	三〇・三	三〇・二	三〇・五
5	三〇・八	三〇・八	三〇・五	三〇・八	三〇・三	三〇・二	三〇・五
6	三〇・八	三〇・八	三〇・五	三〇・八	三〇・三	三〇・二	三〇・五
7	三〇・八	三〇・八	三〇・五	三〇・八	三〇・三	三〇・二	三〇・五
8	三〇・八	三〇・八	三〇・五	三〇・八	三〇・三	三〇・二	三〇・五

東京清算米

東京清算米(東京期米)は日本橋彌穀町の東京米穀商品取引所、第一部米穀市場に於ける取引相場である。市場は毎日午前八時五十分から開始され、立會は、前場、後場に分れ前場は午前八時五十分、第一回(一節)の當、中、先の立會があつて九時二十分に第二回(二節)、其の後は三十分毎に三節、四節、五節と八節まで八回、後場は午後一時二十分に第一回(一節)を立會ひ、それから七節まで七回に渡つて立會はれる。相場表中の1

2 3 4 5 6 7 8 は此の節を表はしたもので右側の當、中、先、は限月を示したものである。賣買の標準米は、埼玉縣一等普通品で(以前は埼玉縣中米)相場の呼び値は玄米一石建であ

大阪(單位錢)

前場當	中	先	後場當	中	先
1	310	310	310	310	310
2	310	310	310	310	310
3	310	310	310	310	310
4	310	310	310	310	310
5	310	310	310	310	310
6	310	310	310	310	310
7	310	310	310	310	310
8	310	310	310	310	310
9	310	310	310	310	310
10	310	310	310	310	310

名古屋(單位錢)

前場當	中	先	當	中	先
1	310	310	310	310	310
2	310	310	310	310	310
3	310	310	310	310	310
4	310	310	310	310	310

新潟(單位錢)

前寄	前止	
三月限	287	287
四月限	288	288
五月限	289	289

る。賣買單位は一口百石、それ以上は二百石、三百石といふ様に端数をつけない。

又相場表中、引跡三一・五〇圓位とあるのは、取引所に於ける立會終了後の氣配を表はしたものである。

大阪清算米 大阪清算米は堂島米穀取引所で取引される相場で大休東京と同じ方法で建てられてゐる。標準米は、攝津米三等普通品とされ(以前は攝津中米)立會は前場十節、後場六節である。

各地清算米 現在全國の米穀取引所は二十余ヶ所あり各々其の地方々々の米を標準として取引をして居るが主として東京、大阪兩取引所を中心として此の相場を参考にしてゐる。然し地方は地方で各々特殊の事情を以つて居るので信州と越後の如く關係深い地方の相場は見逃してはならない。前掲相場表中の名古屋、新潟、神戸、下關等呼び値はみな一石建で相場中に「前寄」とあるのは前場の寄付「前止」とあるのは前場止(トメバ)の略で前場

各地(單位錢)

神戸	前止	後止
下ノ關	2927	2926
	3100	

するものは生絲や株式で述べたようにやはり前場、先物の大引相場が最もよい。即ち、東京では先物八節の三一・五三圓、大阪では十節の三一・四五圓、名古屋では八節の三一・二〇圓、新潟は五月限の前止二八・七六圓である。

東京麥粉 強調

(單位錢)

鶴印	見當	3	見當
3	310	310	見當
4	310	310	見當
5	310	310	見當
7	310	310	見當
現物	見當	78	見當

てゐる。市場取引とは一般に仲間取引と言はれてゐるもので多くは轉賣、買戻によつて差金の

取得を目的とする一種の投機取引である。而して、これには一定の市場が設けられておらず、なく仲立人があつて問屋間を奔走し賣買取引の仲立をするのである。前掲相場表は市場取引相場の中で中に現物とあるのは實物の受渡を目的とする現物取引の相場で、他は差金取得を目的とした市場取引の相場である。表中、34578 とあるのは賣買契約の受渡期限即ち、清算取引の限月に相當するもので鶴印(日清製粉會社)、竹印(日本製粉會社)は、標準銘柄を示したものである。取引さるゝ單位は一千袋で、呼び値は一袋である。

又相場の下に「見當」とあるのは、一定の市場で取引された公定相場でなく、仲立人の奔走による個々の取引を綜合し氣配によつて作つた相場であるから「見當」と付したのである。

大豆粕相場

神戸豆粕(單位錢)

7	6	5	4	3
前場一節	四節	後場一節	四節	

大豆粕は現在我が國の販賣肥料中、最大の需要を有する有機肥料で滿洲國から年々四千萬圓の輸入をなしてゐる。上掲相場は神戸米穀肥料取引所に於ける清算取引の相場を表はしたものの、立會は前場第一節が午前十時に開始されそれから四節まで四回立會ひ後場は午後一時三十分から、前場同様四節まで

行はれてゐる。前掲相場は各場共に第一、四節のみを表はし他は省略したものである。賣買期限は五ヶ月制で表中の34567は限月を示したものである。相場の呼び値は百斤建(一枚は四六斤であるから百斤は二・二枚にあたる)賣買取引の單位は一千枚である。

正玉、インボイス

大豆粕の取引の外にインボイス取引、正玉取引の二種がある。上掲

肥料(深川峰岸商店調)

豊年撒豆粕一畝清水工場渡	三、四
大豆粕(一枚神奈川貨車乗)	二、〇八
インボイス五月渡	四、四四

相場は東京深川のインボイス取引、正玉取引の相場で本紙「農産物市況」中のものである。

インボイス取引とは深川豆粕聯合會所屬の商店と産地の問屋との間に行はれる先物取引で大豆粕の取引中では最も多い取引である。呼び値は百斤(二・二枚)取引の單位は一

萬枚で五ヶ月先迄の取引を行ふことが出来る。

正玉取引とは現物取引の別名で賣買單位が小さい爲めに資本の少い問屋、又は地方問屋の間に行はれ呼び値は一枚、賣買單位は一車(十通、一車三六〇枚)を普通とする。上掲表中の「一枚、神奈川貨車乗二・〇八圓」は正玉取引相場で神奈川驛の貨車積値段が一枚二・〇八圓といふのである。「インボイス五月渡四・四四圓」は、インボイス取引による五月未渡(三ヶ月先物)の値段が百斤四・四四圓といふのである。

綿糸相場

昭和九年の本邦輸出貿易を見ると第一が綿織物の四億四千萬圓で次は二億六千萬圓の生糸である。何十年間、輸出の王座を占めて居た生糸が第二位に落ちたといふことは、生糸自身の値

東京定期(單位十錢)

9	8	7	6	5	4	3	9	8	7	6	5	4	3
三八一	三九〇	三九七	四〇〇	四〇三	四〇六	四〇九	三八一	三九〇	三九七	四〇〇	四〇三	四〇六	四〇九
後場一節	二節	三節	四節	寄	引	後場寄	後場一節	二節	三節	四節	寄	引	後場寄

下りと輸出不振に起因するのであらうが一方に於て我が紡績業、綿織物業の世界的躍進を見のがしてはならない。

綿糸の清算取引は大阪三品取引所、東京米穀商品取引所第二部(杉ノ森、人絹、綿糸市場)名古屋綿糸布取引所の三ヶ所で行はれる。立會は各取引とも午前四回、午後四回で此の回数に稱呼は東京では第一節、二節、三節、四節といひ大阪では寄付、寄止、中寄、大引と呼び名古屋は東京同様の第一節、四節である。

次頁相場表は大阪の寄止、中寄、名古屋の第二節、三節を略したのである。賣買期限は取引所法により十二ヶ月に定まつてゐるが實際は七ヶ月で表中の3456789は此の限月

東京現物(單位圓)

場	富士一〇	富士一六	富士三〇	大島四〇	大島三二	大島四〇	紫金四二	大島六二	黒龍六〇	諫鼓六四	諫鼓八〇	大島百
一〇	一六	三〇	四〇	三二	四〇	〇	四二	六二	六〇	六四	八〇	百
寄	引	寄	引	寄	引	寄	寄	引	寄	引	寄	引

大阪(單位十錢)

9	8	7	6	5	4	3	9	8	7	6	5	4	3
三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
寄	引	寄	引	寄	引	寄	寄	引	寄	引	寄	引	寄

名古屋(單位十錢)

6	5	4	3	6	5	4	3
三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
一節	四節	一節	四節	一節	四節	一節	四節

を示したものである。

賣買の標準品は東京では富士瓦斯紡績の赤富士標左捻二十番手、大阪では東洋紡績の金魚標左捻二十番手、名古屋では東洋紡績の赤三標左捻二十番手で、相場の呼び値は一梱即ち四十五玉入、重量四百封度(四十八貫)で、賣買單位は十梱である。

番手 番手(バンテ)とは糸の太さのことで一総一ポンド(百二十匁)の糸で長さ八百四tyard(二、五二〇尺)あるものを一番手といひ二番手とは長さが二位になつて重量が同じ一封度の糸の太さである。従つて右の標準品である二十番手は長さが八百四tyardの二十位で重量が一ポンドの糸をいふのである。綿糸は生糸と反対で番手が多ければ多い程、細糸になるのである。

玉 一玉とは十ポンド(一貫二百匁)の重量の一括をいふので四十玉とはこれが四十個よつたもので之れを一梱と云ふ。一梱には四十玉入れと二十玉入れとがある。

東京現物 綿糸の現物取引は、取引所外に於て綿絲商を中心として行はれるもので、前掲相場表中「鳩」とあるは各會社の銘柄、下の「一〇」は一〇番手、「一七七」は一捆一七七圓を示したものである。表中の各會社銘柄を挙げれば左の通りである。

- 鳩 (大日本紡績)
- 紫金(大日本紡績)
- 富士(富士紡績)
- 大鳥(鐘淵紡績)
- 黒龍(日清紡績)
- 大島(鐘淵紡績)
- 諫鼓(鐘淵紡績)

砂糖の取引

次表は東京砂糖取引の相場表である。同取引所では清算取引、實物取引の二つが行はれて居る。相場の呼び値は正味和百斤建(一斤百六十匁)賣買單位は百袋(一袋は和百五十斤)である。

東京精算

8	7	6	5	4	3
前場一節	三節	後場一節	三節		
10M0	10M1	10M0	10M1	10M0	10M1
10R0	10R1	10R0	10R1	10R0	10R1
10PR	10PR	10PR	10PR	10PR	10PR

取引の期限は六ヶ月制、上表345678は三月限から八月限までの限月を表はしたもので、立會は前後、各場共に三節である。

清算市場に上場される砂糖は臺灣分蜜糖中双(チュウザラ)で百斤について四圓五十錢の砂糖消費税を納めないものである。

東京現物 強調

標準品は臺灣製糖會社の製品TAB標で、これと同格の日本製糖會社のDSA、明治製糖會社のMSIII、鹽水港製糖會社のESB、帝國製糖會社のTEA、新高製糖會社のNSA等がある。相場表中の東京現物は現物相場を示したもので、呼び値は清算同様百斤である。「分蜜」といふのは粗糖とも云ひ、新式大規模の設備により製造したもので薄黄色を呈してゐる。「精糖EP」は鹽水港製糖會社で製出された精糖である。精糖は分蜜糖を原料として製造され一般家庭で普通に用ひられてゐる砂糖である。「A双」は鹽水港精糖製出の耕地白糖、耕地白糖といふのは耕作地(臺灣)で原料から直接に製出した白いザラメで普通白双(シロザラメ)と呼ばれて一般家庭に使用されてゐる。

農産物市況

農産物市況は東京方面に進出しつある信州農畜産物及び養鶏飼料肥料等の農家經營に必要な物品の相場を掲げたもので、毎日午前中、東京各市場の間屋で調査した値段に依るのである。青果、木炭、兎毛、鶏卵、肉類、蜂蜜、藥用人蔘は東京のこれ等問屋の店頭値段であるから、そこから信州各地より問屋までの運賃諸掛を差引いたものが農家にて直接取引さる値段で

ある。

日銀帳尻

三

我が國は昭和七年下半年からインフレ政策が行はれてゐる。即ち政府は財政上の歳出超過を年々八、九億圓の公債に仰ぎ軍需工業、農村救済に多額の支出をなし以て、通貨の膨張を誘導して不景氣を轉向させやうとしてゐる。現在吾々の用ひてゐる貨幣には紙幣(日本銀行兌換券)銀貨、白銅貨、銅貨等があるが、就中流通の主体をなしてゐるものは紙幣であるからインフレ政策が進行して、通貨膨張を來たすといふのは此の紙幣の量が増加することを指すのである。

日銀帳尻(廿八日)

(單位千圓)

兌換券	一、三七、四八	増	七、六八
發行高	四七、六六	増	三、三三
正貨準備	二四、九八	増	二、五八
預金	八八、八四	増	三、五八
貸出高			

紙幣の量 紙幣の流通高は毎日其の發行銀行たる日本銀行

(以下日銀と略す)から日銀帳尻を通して發表され我が國財界の動きを觀測するに最も大切な材料を提供してゐる。前表中の兌換券發行高といふのは紙幣の發行高で十三億二千萬圓といふ莫大な高が二月二十八日に發行され翌三月一日へ繰越されたのであつて其の時に於ける我が國の通貨の需要を表はしたものである。

一体、この發行高は月初から中旬に進むにつれて日々減少しそれから二十日頃を最底として月末に近づくに従つて日々増加する。かくして月々同じ現象を繰返すのであるが殊に十二月の大晦日前は一ケ年間の最高を現出することが平常の状態になつてゐる。

兌換券の發行は日本銀行に與へられた特權で、同行ではこれと同額の金貨、金地金を用意して發行することになつて居る。次の、正貨準備四億七千萬圓といふのは即ちこれである。然し我が國の財界の狀態によつて所有の金貨又は金地金の量だけ發行して居るとすれば今日とても需要を滿すことが出來ないので特に其の上、十億圓に限り政府發行の公債、其の他の證券を保證として發行することが許されてゐる。これを保證準備發行といふ。つまり現在四億七千萬圓の正貨準備があるから、其の上十億圓といへば十四億七千萬圓の發行が出來るのであるが尙財界の情勢によつては大藏大臣の認可を受けて更に増發することが出来る。之れを制限外發行といふ。昨年十二月二十四日の十四億五千七百萬圓(正貨準備四億六千五百萬圓)から二十六日の十五億二千萬圓、二十九日の十六億六千八百萬圓に増發されたのは限外發行によつたもので年々此の期節は資金需要の爲め發行高が急増する。

次に「預金」とあるのは日銀にある當座預金のこと、これには政府の當座預金と一般銀行の當座預金とある。目下一般銀行の當座預金は六、七千萬圓であるから他は全部政府預金と見て差支ない。

三

「貸出」といふのは市中銀行の日銀に求めた手形割引の高を主としたものであるが。前掲の八億一千八百萬圓中には、昭和二年の金融恐慌の善後策として行はれた所謂「特別融通法」による割引手形の残高が五億五千萬圓程ある。これは昭和十二年五月九日迄に回収さなければ五億圓を限り日銀の損失として、政府が補償してくれることになつてゐる。

東京市中金利

東京市中コール(一日)

	最低	最高	標準
翌日拂	八厘一八厘	八厘	八厘
無條件	七厘五毛一八厘	八厘	八厘
普通	七厘五毛一八厘	八厘	八厘
割引手形日歩(一日)			
紡績	九厘一錢二厘	保合	保合
商業	一錢一錢六厘	保合	保合
擔保付	一錢二厘一錢六厘	保合	保合

コール 銀行は一般から預金を受けて之れを資金需要者に貸出して其の金利の差を收得するのであるが、受入れた預金を全部貸出すといふことは、収益を得る上から云へばよいが何時預金の引出が無いとも限らないので策を得たことではない。そこで預金の一部を、支拂準備として用意して置くのである。支拂準備高を如何程にするかはその銀行によつて異なるが若し準備の必要を要しない時は、それだけ資金の運轉を停滯させるので、極く短期間でしかも銀行の通知次第、直ちに回収し得る約定で、之れを放出する此の短期貸付をコールといひ、借主から見ても「コールマネー」貸主の方から見ても「コールロー

ン」と呼んで居る。前表中の「翌日拂」は今日貸出して明日返済を受くるものでコール中最も期日が短く百圓につき一日八厘の利息を示してゐる。「無條件」は貸出した日の翌日から以後に於て一日前に豫告を以つて返済して貰ふもの。「普通物」は貸出した日から一週間据置き其の後は無條件と同じく前日に豫告して返済して貰ふものである。

割引手形日歩 割引手形日歩は東京に於ける手形割引の歩合を示したもので表中「紡績」とあるは、紡績手形のこと、紡績會社が綿花の仕入れにあつて綿花商に振出した手形で、最も信用あるものだから他の手形に比して歩合が安い。又「商業」とあるのは商品の賣買によつて振出された商業手形のこと、「擔保付」といふのは公債、社債、株式等の證券、或は商品を擔保とした手形のことである。

東京手形交換高

東京手形交換高	(單位圓)
交換高	三〇、四六、三六
交換尻	三三、六七、二六

東京に本店を有する四十余の組合銀行は毎日自行に受入れられた小切手手形で他行の支拂にかゝるものを其の組合にて設立されて居る手形交換所に持寄り交換決済をするのである。上掲の交換高二億三千万圓は此の交換所に於て交換された高で日々の交換高の増減は商取引の盛衰を表はすものである。

紐育生糸

海外市況(廿八日)

ニューヨーク生糸現物

ブランドX(白十中)一弗六仙 保合
クラックX(黄廿一中)一弗三仙 保合

ニューヨーク清算生糸

2 一弗三仙二分一 6 一弗三仙二分一
5 一弗三仙 7 一弗三仙
4 一弗三仙二分一 8 一弗三仙二分一
5 一弗三仙 9 一弗三仙

出来高

XO口

六〇俵

紐育生糸の格付は

××× トリブルエキストラ (九〇以上)
G×× グランド、ダブルエキストラ (八五以上)
C×× クラック、ダブルエキストラ (八〇以上)
×× ダブルエキストラ (七五以上)

我が國の輸出生糸は大部分米國へ積出されるのであつて其の消費地即ち米國に於ける糸價が本邦の糸價を左右することは「生糸」の項で説明したことであるが其の米國の糸價といふのは「ニューヨーク生糸現物」「ニューヨーク清算生糸」のことである。

紐育生糸現物は、紐育に於ける本邦生糸の値段で表中のブランド×、クラック×といふのは格付の名稱である。

× エキストラ

(六五以上)

で下の九〇以上又は八五以上といふのはセリブレインの點數を示したものである。

我が國に入電される主なる相場は白十四中ブランド、ダブルエキストラ(八五點以上)クラック、ダブルエキストラ(八一點以上)の二種と、黄二十一中 クラック、ダブルエキストラ(七八點)である。前掲表中の、ブランド×は白十四中ブランドダブルエキストラのことクラック×は黄二十一中のクラック、ダブルエキストラを示したもので一弗六六仙、一弗三一仙は、一封度(一一〇及九六)の値段である。

紐育清算生糸

紐育清算取引は同地のナショナル生糸取引所に於て行はれ、限月八ヶ月建値は現物と同じく一封度建、取引賣買單位は十俵(一俵百斤)である。標準生糸は百十四中D格で受渡の範圍は日本生糸白十四中六格(ABCDEF)及び白黄二十一中二格(白WV、黄XZ)である。尙相場表中の「保合」(モチアヒ)は前日の相場と變りのないといふ意味を表はしたものである。

紐育棉花

今、米國から自動車を買つた丙が、其の代金を支拂ふには先づ正金銀行（シヨウキン）に行き紐育の銀行で支拂ふ手形を買ふのである。そして此の手形を圖表の様に米國の丁に送る。丁はそれを「支拂銀行」である紐育の銀行に提示し支拂を受けるのであつて、丁度本邦の郵便局によつて送金（爲替）するのと同じ理窟である。ところが郵便局で取扱ふ爲替は百圓といふ爲替金額は東京へ行つても大阪へ行つても百圓の現金に換へられるのであるが、丙が正金銀行から求める手形は日本の圓で表はさないで、米國の貨幣（弗）で表はさなければならぬ。（外國爲替手形は、支拂地の貨幣で表はす）そこで、正金銀行では我が國の百圓が、米國の何弗にあたるかを定めておいてこれに換算して手形を丙に賣るのである。此の本邦貨幣の百圓が外國の貨幣で、何程にあたるかを「爲替相場」といふ。上掲相場表中の「米日爲替二八弗三四仙」とあるは紐育で建てられた米日爲替相場で、邦貨百圓は米貨二八弗三四仙であることを示したものである。

米英爲替 四弗四仙 二仙四分一安
 米日爲替 二六弗四仙 九仙安
 支日爲替 二二兩 四分一安

又米國の乙へ、生絲を賣つた甲は乙から送金されるのを待たないで乙を支拂人とした手形を振出し之を正金銀行へ賣るのである。此の場合銀行は丙に手形を賣つた時と同じく「爲替相場」によつて手形金額を圓に換算し代金を甲に支拂ふのである。

本邦の爲替相場は東洋の一部を除いては受取勘定といつて百圓とか一圓とかいふ自國の貨幣

を基準として相場が建てられる。

「米英爲替」は、普通英米クロスレートといつて、世界各國の爲替相場の標準になり、建値は英貨一ポンド建である。

「支日爲替」は、上海に於て建てられた日支間の爲替相場で支那の一〇〇銀弗が我が國の一三六圓に當ることを示したものである。

銀塊と支那

世界の銀相場の標準はロンドン市場に於ける銀塊相場で此の取引には現物、先物の二種類がある。上掲相場は現物相場でロンドンの銀仲買商四軒の代表者が毎日會合し各國からの買注文

銀塊
 ニューヨーク 英仙三分一 四分一高
 ロンドン 三五片二分二 一分一高
 二九匁である。

賣注文を持寄り、協定して發表したもので、標準品は一千分の九二五の純銀を含むものとされ一オンス（八・二九匁）何片と呼ばれてゐる。紐育の相場はロンドン相場を英米間の爲替相場で米貨圓に換算したもの、建値は一オンス（八・

銀塊相場と支那 支那は銀本位國であつて、銀塊相場の騰落は直ちに通貨、外國爲替相場に影響を與へ、財界を變動させるので我が國の日支貿易に關係ある者はその直接と否とを問はず常に銀塊相場による支那財界の變動に注意すべきである。

上海の銀行に於ては毎日ロンドンの銀塊相場の入電によつて、左の如く

ロンドン銀塊相場×1.172(兌換)＝上海、ロンドン銀塊相場

支英爲替相場を算出し之れを基準として支米、支日等の各地の相場を建てるのである。昨年八月米國が、銀國有令を發して以來倫敦、紐育の銀相場は月毎に騰貴した。そのため上海爲替相場も又騰勢をたどり國內の物價は益々下落し其の上、米國へ向つて銀流出が拍車をかけて銀塊暴騰＝銀流出＝爲替相場上騰＝物價下落と、急轉向の變化を來し目下支那の財界は恐慌を招き塗炭の苦みの裡にある。

紐育株式

株式の相場は其の國の財界の情勢をよく現はすものであることは「株式」の項で説明したことがあるが、我が國に新東、鐘紡といふ花形株がある如くスチール株、アナコンダ株は米國の花

スチール株 三弗二分一 八分三安
アナコンダ 九弗四分三 八分一高

形株である。「スチール株」は米國第一の大鋼鐵會社、ユー・エス・スチール會社の株で同會社は製鐵、炭鑛、コークス、セメント、造船、海運、倉庫、鐵道等の事業を営み其の營業状態の如何はよく米國財界の好、不況に反映するのである。一株の金額は百弗全額拂込み、上掲相場は大引値段である。「アナコンダ株」は米國に於ける最大の製銅會社であるアナコンダ銅山會社の株で一株五十弗拂込濟のものである。

紐育公社債

紐育公社債は紐育に於て豫て發行された我が國の外貨公債と、外貨社債で額面は百弗である。「六分半付米債」といふのは今から三十年前、日露戰役の開戦と同時に現高橋藏相が米國に於て困難辛苦、成立させた公債で日露開戦三十週年を迎へる今日思ひ出多いものである。のち大正十三年即ち大震災の翌年に償還期が來たので六分半といふ三等國待遇の高率利子に借換へられたの

ニューヨーク公社債
六分半付米債 三弗八分三 保合
五分半付米債 二弗四分一 保合
東京五分米債 七弗二分一 二分一高
横濱五分米債 八弗二分一 二分一高
東電六分米債 七弗八分五 八分三安
大電六分米債 七弗八分一 八分三安
東邦電力七分

豆油(單位厘)	引	7.
(百斤)寄	1.550	銀票(單位錢)
現物	1.440	寄引
3	1.440	寄引
4	1.440	十三日 1.370 1.360
5	1.440	十五日 1.440 1.440
6	1.440	十五日 1.440

上掲表中、大豆粕現物は一枚一・四〇五圓とあるが、此の四圓四十錢五厘は關東州、滿鐵沿線で用ひられて居る金建でなく鈔票(銀建)によつたものである。鈔票は明治三十九年に正金銀行牛莊支店から發行され日露戰役に流通された軍票の整理に用ひられたものである。後種々に變化して鈔票の流通は強制力がなくなつたが習慣上支那人の間に

は此の鈔票をもつて、大豆や大豆粕の取引が行はれてゐる。そこで又大連取引所では此の鈔票の取引が行はれて居て鈔票一〇〇圓を金票一三七圓で賣り又は買ふ。上掲相場表の銀票(鈔票と同じ)は之れを示したのである。従つて先の大豆粕一圓四十錢五厘は金票建に換算すれば

$$1.405圓 \times \frac{137(銀票)}{100} = 1.92圓$$

となつて内地の大豆粕相場に接近して其の値開が少くなる。

相場用語集

あ の 部

- 上げ場(あげば) 買方が相場を騰貴させる場合又は時期をいふ。
- 足取(あしどり) 相場の動いた経過。相場が歩んだアトの意。
- 頭重(あたまおも)「づおも」ともいふ。相場が上りさうであたり兼ねる有様。
- 跡氣配(あときはい) 大引後の相場の動向。引跡氣配に同じ。
- 甘い(あまい) 相場の低落氣味なこと。
- 歩み取引(あゆみとりひき) 取引所取引の競争買の一種。同一立會において一銘柄につ

い の 部

- いて澤山な相場が出来るいはゆるザラ場に於ける取引の進行をいふ。
- 有りがすれ(ありがすれ) 眞のカスレでなく事實上品はあるが、持筋の買惜しみて供給不足の状態をいふ。
- 生かす(いかす) 取引員が一旦手仕舞つた客の建玉を話合のうへで復活させること。
- 一の廻り(いちのまはり) 一箇中で二回以上立廻りする場合の最初の立會。
- 居直り(いなほり) 相場の勢ひが下落から昂騰に轉じたこと。

違約處分(みやくしよぶん) 取引所取引で取引員または会員が違約した場合に行ふ制裁處分。

違約追償金(みやくついしよきん) 違約處分に付したとき違約者の總計算において取引所が受けた損失を償つて餘剩ある場合に違約者に返戻しまたは違約者の株數に應じて分配する金員。

嫌氣煎れ(いやけいれ) 賣方が嫌氣さしで煎れ退くこと、即ち賣玉を買戻すこと。

嫌氣筋(いやけすぢ) 買なり賣なりを有するものが倦怠を生じた場合をいふ。

うの部

浮足(うきあし) 相場の高低が定まらぬため賣方買方ともに自信なきこと。

番

受株(うけかぶ) 買玉を轉賣せずそのまま持耐へ受渡期日、短期ならば任意に買付株を受取ること。

受腰(うけこし) 清算取引で買方が株や米などの實物を受取らうとする態度。

受渡し(うけわたし) 市場の決済をいふ。

受渡し攻め(うけわたしげめ) 買方が買占めなどによつて受渡すべき現品を不足させ賣方を苦しめる戦法。

薄鞘(うすざや) 當限より翌月限、翌月限より翌々月限の方が順次に高いのが常態でこれを本鞘といふその鞘の少きをいふ。

内氣配(うちきはい) 立會前後または休日など相場を模索して得られた大體の相場。

賣浴せ(うりあびせ) 買物のあるなしに拘らず壓倒的に賣ること。

おの部

追敷(おいじき) 追證據金のこと、本證據金の半額以上の相場變動があつた場合、損方から徴収する證據金。

大手筋(おほてすじ) 大量に賣買する有力なる投機師のこと。

大引(おほびけ) 前場および後場の最終立會押す(おす) 相場の下ること。

落玉(おちぎよく) 轉賣買戻しにより取引所建玉から落される玉。

お祭り相場(おまつりさうば) 亂調子の相場のこと。

かの部

買冠せ(かひかぶせ) 相手方の賣玉をどし

番

賣玉(うりぎよく) 賣注文。賣建玉。

賣慕ひ(うりしたひ) 賣りたがること。

賣りすかす(うりすかす) 買玉を漸次賣つて減らすこと。

賣繋ぎ(うりつなぎ) 實物を持つてゐるか、または實物を買付けてこれを清算市場に賣つけること。

上味(うはあぢ) 相場の上騰氣味のこと。

上支へ(うはさゝえ) 昂騰した相場がそれ以上騰貴し得ぬこと。

上這ひ(うはゞひ) 相場昂騰のこと。

上放れ(うはゞなれ) 相場の遽かに昂騰すること。

上廻る(うはまはる) 相場がある標準相場より高いこと。

どし買ふこと。

カヴァ 空賣りを買埋めること、ある場合には補填の意味にも使ふ。

格付清算取引(かくづけせいさんとりひき)

商品取引所において一つの標準品を立て賣買取引をなし、他の同種の商品は上級のものは格上げとして標準相場よりも高く、下級のもは格下げとして安くしてこの取引所取引に参加せしめ得る様にした清算取引のこと。

空廻り(からまはり) 賣買取引が出来ないで次の賣買取引に移ること。

きの部

期近物(きちかももの) 受渡限月の近いもの、

コール市場では「翌日もの」「無条件もの」な

どをいふ。

逆鞘(ぎやくさや) 清算取引で當限の相場が中限又は先限より高いこと。

逆日歩(ぎやくひぶ) 株式短期取引において賣方が買方に支拂ふ受渡し繰延料、受渡しを繰延べて貰ふ代りに拂ふ日歩順日歩に對す。

玉を繋ぐ(ぎよくをつなぐ) 相場の變動によつて證據金が不足となつたとき追證を提供して建玉を持続すること。

この部

小底入(こぞこいれ) 相場が一時的に下落して少し騰貴すること。

さの部

鞘取り(さやとり) 一方に買ひ同時に他方で

賣つてその間の値鞘により金利以上の利益を得ること。

ザラ場(ざらば) 市場の立會時間と立會時間との間、又は寄付より大引に至るまでの間に行はれる賣買取引の通稱。

しの部

下押す(したおす) 上げ相場が一時的に安くなること。

下長(したなが) 買人氣の旺盛なること。

實株筋(じつかぶすぢ) 實株を持つてる相場師。

仕手(して) 相場をする人。

證據金(しょうこきん) 取引所取引の賣買履行を確實にするため取引所が取引員から又は取引員が委託者から徴収する保證金。

新甫(しんぼ) 清算取引において月初に新しく取引を開始される限月。

すの部

隙かす(すかす) 「玉を隙かす」と云へば建玉を減じてさらに賣買すべき餘力を作ること
掬ひ(すくひ) 手仕舞すること。

迂る(すべる) やゝ急激なる相場下落。

せの部

整石(せいこく) 米穀取引所が賣の申出と買の申出を結び合せて賣買を成立させること

たの部

高なぐれ(たかなぐれ) 急騰後に利喰ひその他の賣物が出て伸縮み商状となること。

叩く(たたく) 賣方が相場を崩す目的で賣る

こと。

建玉(たてぎよく) 取引所において現に賣買約定を行つてゐる取引物件。

つ の 部

頭打ち(づうち) 騰貴した相場が急に騰勢の止つたこと。

繋ぎ外し(つなぎはずし) 現品を保険に付するため賣建してゐたものを買戻してつなぎ外すこと。

強氣筋(つよきすぢ) 騰貴を見越して買に出てゐる連中、買方又は硬派に同じ。

て の 部

出合待(であひまち) 指値の出合ふます待つこと。

手合せ(てあはせ) 賣買成立して拍手すること。

と。

低調(ていちょう) 下落の歩調にあること。軟調に同じ。

出来申さず(できもうさず) 賣買約定が成立せぬこと。

手仕舞ひ(てじまひ) 清算市場に買建てのあるものは轉賣し賣建のあるものは買戻して取引關係を完了すること。

手持筋(てもちすぢ) 賣玉を建てゝゐる仕手のうち實物を持つてゐて、相場が甚しく安くなつた時は玉を買戻さずに受渡日にその現物を渡す實力あるもの。

天井(てんせう) 相場の最高點をいふ。

と の 部

東硬西軟(とうかうせいなん) 東株市場の氣

配が大株市場の氣配より高張つてゐる事。同事(どうじ) 相場の高低比較にひらきなき事。

解合(とけあひ) 賣方と買方とが一定の値段で互に轉買、買戻しをして賣買關係を消滅せしめる行爲。強制解合、任意解合ひなど種別がある。

ドタ 値段の丁度をいふ「三圓ドタ」は三圓かつきりの事。

な の 部

中高(なかだか) 清算取引において中間限月の相場が期近と先物より高い事俗に天狗相場ともいふ。

中値(なかね) 株式商品の賣値の中間をとつた値段。

天

中廻り(なかまはり) 二の廻りともいふ清算市場において一の立會を二節に分つて賣買する際中間の節をいふ。

ね の 部

値合ひ(ねあひ) 通常賣買約定した値段と、後で轉賣買戻した値段との差金、時に依つては相場の氣配と出來値の平均中値を意味することもある。

の の 部

納會(のうくわい) 清算取引市場の當月限立會が終末を告げること。

覗く(のぞく) ある目標の値段以上または以下を値段を表して直に舊に復すること。

伸びる(のびる) 相場が漸次昂騰すること。呑む(のむ) 取引員が客から委託された賣買

売

玉を取引所で實際に賣買せず委託者には賣買したと詐りの報告をなし委託玉は全部懐に納めて了ふこと。

はの部

バイカイ 賣買立會中または立會終了後、同一取引員が同時に賣方買方となつて同一銘柄同一限月の同一數量の賣と買とを同一値段で取引所につけ出すこと。

早受渡(はやうけわたし) 長期清算取引において賣方が受渡期日前に約定の物件を取引所へ提供した場合、買方が受渡しの希望を持つてゐないで取引所が一時買方に代つてその物件を受取ること。

ひの部

引跡氣配(ひけあときはい) 取引所の大引の

あとに生ずる市場の人氣。

ふの部

不味(ふみ) 相場に下落の傾向あること。
踏退き(ふみのき) 損勘定になつてゐる賣建玉を買戻して手仕舞ふこと。

らの部

亂手(らんで) 取引所で賣方買方が激戦し一方が窮地に陥つた際に突飛な値段を唱へて手を振り故意に市場を攪亂させること。

昭和十年三月廿日印刷 (非賣品)
昭和十年三月廿五日發行
編集發行 長野市妻科一七三
兼印刷人 大日方利雄
發行所 長野市南縣町六七五
信濃毎日新聞株式會社

終

